

Title	王昭君詩と大石良雄：『新齋夜語』第一話の「名利」説をめぐって
Author(s)	飯倉, 洋一
Citation	語文. 2016, 105, p. 1-11
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/70969">https://hdl.handle.net/11094/70969</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

# 王昭君詩と大石良雄

——「新斎夜語」第一話の「名利」説をめぐって

飯 倉 洋 一

はじめに

梅臚館主人作「新斎夜語」は、大坂の田原屋平兵衛が出願し、安永四（一七七五）年正月、田原屋と糸屋源助の相板で刊行された。刊記によれば京都の錢屋莊兵衛と江戸の須原屋茂兵衛が売り出し書肆であった。半紙本五巻五冊、全九話からなる短編奇談集で、文学史的には談義本的色彩の濃い初期読本に位置づけられている（徳田武「新斎夜語」と談義本」「日本近世小説と中国小説」、青雲堂書店、一九八七年。初出は一九七二年）。浜田泰彦・笹田将樹「新斎夜語」解題と翻刻」（二〇〇四）二〇〇六年度科学研究費補助金基盤研究（C）研究成果報告書「奇談」書を手がかりとする近世中期上方仮名読物史の構築」研究代表者 飯倉洋一、二〇〇七年）に翻字が備わ

る。  
作者の梅臚館主人は幕臣。二条城や大阪城の警護を務める大番の三橋成烈で、冷泉派歌人でもある。その経歴・文事については

前掲徳田論文および市古夏生「梅臚館主人と飛檄連中——「飛檄」「飛檄隨筆」を通して」（堀切実編「近世文学研究の新展開——俳諧と小説——」（ベリかん社、二〇〇四年）に詳しい。

本書についてかつて私は、その〈学説寓言〉性の濃さを指摘したことがある（「上方の「奇談」書と寓言——「垣根草」第四話に即して——」（「上方文藝研究」第一号、二〇〇四年。「大江文壇と源氏物語秘伝——学説寓言」としての「怪談とのる袋」冒頭話——「語文」第八十四・八十五輯、二〇〇六年）。〈学説寓言〉とは飯倉の造語で、いわゆる寓言的手法を用いる読物の中でも、古典にかかわる学説を登場人物が述べるものをいう。「雨月物語」「仏法僧」の登場人物紹巴が展開する歌語「玉川の水」の考証的議論がその例である。「新斎夜語」諸篇は〈学説寓言〉が多いことを指摘してきたが、具体的な作品論には及んでいなかった。本稿はその冒頭話である「北野の社僧昭君の詩を難ず」を読む試みである。本話は、〈学説寓言〉的な一面を持ちながらも、思想的な寓意も籠められている。

まず、その梗概を紹介する。

播州から上京し山科に盤居していた大石良雄は、冬半ばのころ、次男大三郎を連れて、北野天満宮に参詣した。絵馬堂に佇み、「宇治川の先陣争い」や「草摺引」の絵馬を大三郎に見せ、「このような勇氣をもつことで、後世に名を知られる」と教訓した。大三郎は頷いて、別の絵馬を指さし、「あの唐國の、馬上の女性が琵琶を抱いて泣いているのは、いったい誰なの？」と問うた。良雄は「あれは王昭君という人。漢の時代に（匈奴の）王単于の要請で宮女を一人送ることになった。漢の帝は三千人の宮女の絵を画師に書かせ醜女を送ろうとした。絶世の美女であった王昭君は、他の宮女のように賄賂を贈らなかつたため、画師に醜く描かれ、その結果単于のもとに送られる悲劇のヒロインになった。そこで（『和漢朗詠集』所収の大江朝綱の）詩に、「昭君若贈黄金賄、定是終身奉君王（昭君もし黄金の賄を贈らば、定て是身を終ふるまで君王に奉へん）と作られた」と語った。その時に通りかかった北野天満宮の社僧がこの朗詠（解釈）を非難した。これは、その昔詩の訓詁を諫めたという天神のお告げかもしれないと、先ほどの社僧を本殿に訪ね、「息子が疲れているから休ませてほしい」と頼むと、

「ちよつとした（てにをは）の違いで意味が大いに変わってくる。王昭君が名を遺したのは、容貌ばかりではなく心が正

しく美しかったからだ。大江朝綱は「昭君もし黄金の賄を贈りなば、定て是身を終るまで君王に奉るのみならん」と作り、賄賂を贈らなかつたからこそ昭君が美名を遺したという意味を含ませてその潔白を称賛したのである。それを貫下のように訓ずれば、その清潔を過ちだと言っているようなものだから思わず非難したのだ。今の世に仕える人々もその心得違ひするものが少なくない。名利ふたつながら忘れてこそ、道に近づくのである。至人は名もなく徳もない。さらに不可一条の道を得るならば、これらは論ずるに足りない」と語った。良雄は、心中にある思いがあつたので感銘を受けた。再び社僧を訪ねた時、社僧を知るものはいなかつた。

大石良雄、北野天満宮、王昭君詩、徒然草（後述）と、思わせぶりな諸設定だが、さて本話をどのように読めるのか。ここでは江戸時代の読者が「新斎夜語」をいかに読んでいたかをまず押さえ、それを手がかりとして、考えてゆきたい。なお、本稿で引用する江戸時代の文献の本文は、原本または影印版に拠るが、読みやすさを考慮して、稿者が校訂を施している（漢字は原則として通行字体とし、句点を一部省略するか読点に改め、必要に応じて濁点を付し、振り仮名を適宜付加あるいは省略し、明らかな誤りは正した）。また傍線を私に付すことがある。

一 読みの前提

『新斎夜語』は現在ほとんど顧みられない作品であるが、江戸時代においては必ずしもそうではなかった。

伊丹椿園作『今昔唐錦』(安永九(二七八〇)年正月、京都菊屋安兵衛刊)の見返しに、

近来梓行の国字小説、多き中にも、類を同じうて雅俗ともに喜びもてあそぶは、英草紙・繁野話・垣根草・新斎夜語・雨月物語・翁草なり。今此唐錦を合して、奇談七部の書といはむのみ。／皇都 書林 菊英館識

とあり、書肆菊屋が「英草紙」「繁野話」「雨月物語」らと並ぶ位置づけを行っていることから、その評価の高さがわかる。また注目すべきは、芍薬亭長根作「坂東奇聞濡衣双紙」(文化三年(一八〇六)正月、江戸松本平助刊)自序に、本作が中国小説の翻案物の怪談として系譜づけられる(高木元「江戸読本研究序説」「江戸読本研究 十九世紀小説様式放」、ベリかん社、一九九五年)中で、

(都賀庭鐘の「英草紙」「繁野話」と比較して)新斎・前席・垣根草の初篇、文花降くだらといへども、事に託て自己の識見を述、議論高たかにいたりては、剪燈の書中、子胥范蠡を罵ののるの流

亜いにして、二書の美を奪うばに足れり。(下略)

と、反古齋作「怪異前席夜話」(寛政二(二七九〇)年、江戸三崎屋清吉刊)・草官散人作「垣根草」(明和七(二七七〇)年、京都錢屋七郎兵衛刊)とともに、「事に託て自己の識見を述、議論高き」と指摘されていることである。これはまぎれもなく寓言的手法についての言及である。

また「新斎夜語」の本文自体に、寓言について言及しているところがある。

第六話「戸田茂睡つれく草を読む」は、戸田茂睡が「徒然草」七三段「世に語り伝ふる事、まことはあいなきにや、多くは皆虚言なり。…」の講釈を行う。その中で、ある棟梁が、神社建立のために、絵図を見せて実力のある棟梁を捜す話がある。その時絵図にはわざと柱を一本書かずにおき、それを見て「柱をもう一本増やせば絵図の通りに建てられる」と言った匠が選ばれた。そこで茂睡はいう。

是をもて考るに、書毎に誠のみを書かば見る人の力も入らず。学問工夫も荒かりぬべし。されば釈迦の説給ふ経は、四十九年未頭真実と自ら無量義経に曰ひぬれば、誠のみを説けるにあらず。地獄天堂の沙汰も、いかさまにも誠としがたし。されば儒家よりは釈氏の悟らしむるといふは、本迷もとはざるものを迷はしめて、後に漸其迷ひをわかつなり。(中略)

源氏物語も是又寓言にして、は、きゞの「有とは見えてあはぬ」をかたどり、誠かと思へは虚談にて、偽かとおもへは実語なり。其虚実は見ん人の心に味あじて、是を甘しとも酢しとも嘗か分けて其善を見てはせよといはねども、憤発して是にひとしからん事を思ひ、悪を見ては禁ぜざれども、戦競して内に自ら省てこそ、書をよめる徳とも成ぬべし。(中略)

倭漢の群書を見んもの、是は実録なりとて、悉く信じ、是は戯作成とて皆捨んは大なる誤にて、泥の濁れるを見て、蓮の清きをしらぬ類成べし。内外の聖典の深き事は、何某が明らかに知侍らぬ事なれば且置おき。近く哥物語・軍記など其外誰たれ渠が筆ずさみてふものなど見んには、其真偽虚実を論ぜず、書るもの、意趣の在所ところに心をつけて、繰返し侍れば、千年の後に生れて、千歳の前の人に対面する心地して、自ら心も慰みつれくも忘るゝなれ。

茂睡の説くところは、「実録」(事実の記録)だけを信用し、「戯作」は読み捨てるべき無価値なものと考えるのは大きな誤りで、真偽虚実は別にしてテキストの「意趣の在所」に留意すれば、千年後に生まれたとしても千年前の人に対面するような気持ちで自らの心も慰められるのだという、一種の読書論と見ることができ。虚実相半のテキストの事例として「歌物語」「軍記」が挙げられているのも注目すべきである。ここから実作論を導くとすれば、事実の虚構化は、「意趣」を盛り込むための手段であるとい

うことになるだろう。そのことを踏まえると、第一話はその虚構化の部分に「意趣の在所」を突き止めるヒントがあると言えるだろう。

また「新斎夜話」は、前述の通り、初期読本に多く見られる〈学説寓言〉色の強い著作であり、それは九話中七話に及ぶ。作者は本話でも「和漢朗詠集」所収の「王昭君」詩の訓読および解釈について独自の説を披露している。本話は〈学説寓言〉として典型的な一篇であるので、その独自挿入の意図とストーリー展開との関わりを明らかにすることは、初期読本の方法を考える一助にもなるだろう。

## 二 大石良雄と北野天満宮

大石良雄は、いうまでもなく近世演劇で最も人気のあった作品であろう「仮名手本忠臣蔵」(寛延元(一七四八)年、大坂竹本座初演)の大星由良助のモデルであり、歴史的実在人物である。「歴史的」と言ったが、赤穂浪士討入事件(元禄一五(一七〇二)年)は本書の刊行から七十三年前で、記憶の彼方の事件というほどでもない。浅野家は断絶したとはいえ、大石家は安永期にはなお存続していた。実名での大石良雄の登場は、当時出版される説物としては思い切った設定ではなからうか。

冒頭は、「そのかみ播陽に在し、大石良雄は都に登り、山科の辺に、蟄居して」とあるが、山科といえは、忠臣蔵九段目「山科閑居の段」もあって、大石良雄隠居の地として広く知られる。お

家再興への道を探るも結局は吉良邸討ち入りを決意することになる場所として。読物作者が、大石の山科蟄居時に何らかの出来事を虚構し、討ち入りへのストーリーを創造する誘惑にかられることは、ありそうなことだ。良雄が山科にいたのは元禄十四年の六月から十一月ごろまでとされる。これとびったり重ねられているとは限らないが、おおむねこの時期が本話でも想定されているだろう。

作中で、山科蟄居中に良雄が吟じる「もののおのうき身のはての置所されどもてらす秋の夜の月」は出典不明。「うき身にはながむるかひもなかりけり心にくもる秋のよの月」(『拾玉集』一三七五、番号は国歌大観番号)を本歌としたか。作者三橋成烈は冷泉派の歌人であり、自作は可能である。藩主の犯した事件のために城の明け渡しを余儀なくされた後、隠棲するわが身の不甲斐なさを嘆きながらも、一筋の希望を捨ててはいない良雄の心境が浮かび上がる。あるいは人口に膾炙した辞世の句「あら楽し思ひは晴るる身は捨つる浮世の月にかかる雲なし」から発想されたものかもしれない。

さて、良雄は「冬も中半なかばの比、次男大三郎はつさぶが八歳許はつかなるを伴ひて」洛中の寺社を見廻る。「冬も中半なかば」とは十一月頃だが、これが史実に対応する討ち入り前年の元禄十四年十一月を想定しているのか、事件の直前月である元禄十五年十一月を想定しているのか、それ以外なのか、本文からはわからない。大三郎は史実では次男ではなく三男。良雄が切腹死した前年の七月五日に生まれ

ており、八歳という設定は史実とは違う。次男吉之進きちゆき(吉千代)は元禄十四年の赤穂藩改易後、父に従って山科にいた。その時の年齢は十二歳。元禄十五年なら十一歳となり吉之進の年齢の方が本文の設定に近い。

とはいえ、本書執筆の時点ですでに虚実相交えて伝えられていたであろう赤穂事件であれば、作者がどの程度意識的に(史実を變える設定)をしたかという測量は困難である。私が見た限り、良雄の和歌、息子を連れての寺社廻りなどを赤穂事件関係の史料に見出すことができないが、それが全くないとも言い切れないからである。

さて物語の中の良雄は北野天満宮に向き、神前に額づいて、絵馬殿にたたずむ。なぜ北野なのか、そしてなぜ絵馬殿なのか。大石良雄が北野に参詣したという記事はやはり赤穂事件関係の史料・読物には見いだせない。しかし、たとえば談義本や読本にみられる議論問答の範型のひとつに、「太平記」巻三十五の「北野通夜問答」がある。そして北野天満宮は神仏を借りて作者の意見を代弁させる「重言」(莊子「寓言」の中で三言といわれるもののひとつ)を用いるのに最適の舞台のひとつであると言えよう。たとえば「田舎莊子」附録「聖廟参詣」がそうである。そして絵馬堂は京都では清水寺と並んで有名だった。そうしたことから北野参詣の設定は、読者に違和感を与えることはない。

北野天満宮の絵馬堂といえは、その「宮仕記録」(北野天満宮史料)所収)によれば、元禄十四年四月に絵馬殿掛所の新造が行

われ、神事奉行から次のような連絡が廻状で回された。

一、  
松梅院より廻状来ル

覚

絵馬之事、此度掛所新造被為 仰付之上、正殿廻りハ不申及、末社諸堂ニ掛候義も堅可為停止候、廻廊之義は重而可申其沙汰候事

(中略)

巳四月日

神事奉行

ちようど大石良雄が山科に蟄居していた時期と重なり、この史実を成烈が知っていたら、舞台設定に利用しそうではある。

絵馬殿では、「佐々木梶原が川渡し・時致義秀が草摺引など指ざして、大三郎に見せしめ、いにしへの兵はかくこそ、勇みて、世に名をしらるゝ」と教えた。「佐々木梶原が川渡し」は「平家物語」の宇治川先陣争いをテーマとし、「草摺引」は、工藤祐経を討とうとする曾我五郎を朝比奈義秀が草摺を捕えて止めようとする場面。北野天満宮で、当時これらの絵馬がかかっていたかどうかは確認できない。現在の北野天満宮の絵馬所にも、多くの古い絵馬がかかっている。その中には享保や延享の年記のあるものもあり、武者絵がおおく、中国説話をモチーフにした絵馬も確かにある。しかし、宇治川先陣争い、草摺引、そしてこれから話題とする王昭君馬上彈琴図は見いだせない。絵馬の縮図を版本にし

た『扁額軌範』初編（文政二年刊）・二編（文政四年刊）には、清水寺と祇園社の絵馬を多く掲載するが、北野社の絵馬は長谷川等伯画「土佐坊昌俊之図」（二編中巻冒頭）のみである。ちなみに祇園社の「草摺引」（延享三年、服部梅信筆）は掲載されている。

実際に絵馬がかかっていたかどうかはともかく、作中の良雄は「宇治川先陣争い」と「草摺引」の絵馬で、武士が勇敢な行いをもつて名を知られることを息子に教えようとしたことを押さえておくべきだろう。

### 三 王昭君詩の解釈

大三郎は、別の絵馬を指し、「唐の女の琵琶を抱きて今に乗り泣しめるは、いかなる人ぞ」と問う。良雄は王昭君という美人であると教え、絵の事情を説明する。王昭君が匈奴に向かう途中馬上で琵琶を弾く図はよくあるもので、これを花魁道中に見立てたやつし絵もある（奥村政信「遊君王昭君身請のすががき」神奈川県立歴史博物館ホームページに掲載）。良雄の説明は以下のようなものである。

昔、匈奴の王の単于が漢帝に、宮女の一人を賜れば友好関係を保持できると申し入れたため、三千人いる宮女の似顔絵を画工に描かせて、醜い女性を遣わすことになった。宮女たちは画工に賄賂を贈ったが、美貌の王昭君は賄賂をしなかったために、醜く描かれ嫁することになってしまった。そこで、

〔和漢朗詠集〕所収の大江朝綱作「王昭君」という詩の一節にも、

昭君若贈黃金路 定是終身奉君王

（昭君もし黄金の路を贈らば、定めて是れ身を終ふるまで君王に奉へん）  
と作られたのだ。

似顔絵が絡む王昭君説話は中国の「世説新語」「西京雜記」などに見え、琵琶を馬上で演奏する話は「文選」所収の石崇「王明君詞」序文や、李商隱「王昭君」らの詩に見える。（黒川洋一「王昭君の伝説と文学」『殖生野国文』第二号、一九七二年。堀江濤子「王昭君変文「明妃傳」の研究―中国における「王昭君説話」の変遷―」白帝社、二〇〇八年）。日本においても、王昭君説話は漢詩・物語・説話・謡曲らに広がっていく。良雄の説明する王昭君説話は何を参照したであろうか。宮女たちがこそぞつて賄賂を画工に送るさまを「我もく」と良雄は表現するが、これは王昭君説話を記す「俊頼髓腦」や「今昔物語」にも見える。だが、「俊頼髓腦」も「今昔物語」も宮女の数を「四五百人」とする。宮女の数を良雄と同じく「三千人」とするのは近世以前の文献では「唐物語」や永濟注系の「和漢朗詠集抄注」（永青文庫蔵）らであるが、「三千人」に加え「我も我も」の表現をも取り入れているのは、「和漢朗詠集抄註」だけである。本話の趣旨からして、作者が「和漢朗詠集」の注釈書を見ている蓋然性は高いが、「三千人」と「我も

我も」は、近世を通じて最もよく読まれた注釈書であろう北村季吟の「和漢朗詠集註」（寛文十一年刊）にも引き継がれているから、これを参照したと考えて問題ないだろう。ただし馬上で琵琶を弾く王昭君については「和漢朗詠集註」には言及がない。これはやはり「文選」や李商隱詩から摂り入れたものか。

良雄の大江朝綱「王昭君」詩（尾聯）の訓読「昭君若し黄金の路を贈らば、定めて是れ身を終ふるまで君王に奉へん」は、「和漢朗詠集註」では「昭君若し黄金ノ路ヲ贈ラマシカバ、定（メテ）是れ身ヲ終テ帝ニ奉ラン」（「メテ」の施訓はなし）と訓んでおり、良雄の訓みと完全に一致はしないが、その解釈は「是ハ落句也。昭君モ金ヲモテ画工ニマイナヒラ送ラマシカバ、身ヲ終ルマデ君ニツカヘエ、カ、ルウキメラ見ザランモノヲトナリ」とあって、良雄の解釈とはほぼ重なっている。ただし、良雄は漢詩原文の「帝王」を「君王」としている。これは、敢えて改変したというよりも、作者のうろ覚えだったのかもしれない。近世出版の「和漢朗詠集」諸本において、この部分の本文を「君王」としているものはないかと、「和漢朗詠集」の近世期注釈書を網羅的に見ている村上義明氏にうかがったところ、知る限りにおいては存在しないということをご教示いただいた。ただ、天保十年に刊行された「校正和漢朗詠集」（後印嘉永元年）および刊年未詳の大嶋屋伝右衛門から刊行された「新刻和漢朗詠集」、文政九年の「和漢朗詠集」では「君主」が「帝王」ではあるが、「昭君若し黄金の路を贈らば、定めて是身を終ふるまで帝王に奉へん」と訓んで

いるという。ちなみに「君王」では平仄も正しくない（宮川真弥氏ご教示）が、なぜ「君王」と誤ったのかは、考える余地がありそうである（後述）。

さて、あらずじに示した通り、この良雄の解釈は、社僧によって非難される。良雄は社僧に教えを乞う。その答えとなる社僧の解釈の主要部分を引用しておこう。

譬ひ外にをとらぬ貌ありとても、かの黄金を贈りし心の醜さは、いかて愛するに足べきや。諺にも人は一代名は末代といへることく、利慾を離れて名望をおもはんにはしカジ。されば江相公もそのこゝろをふくめて、「昭君もし黄金の賂を贈りなば、定て是身を終るまで君王に奉るのみならん」と作り賂を贈らねはこそ、かく末代に美名をのこしつれとの意をふくませて、昭君か潔白を賛し給へるなるを、足下の吟じ給ふやうにては、昭君が清潔を過てるやうに心得給ふやうに侍れば不図難じ侍る也。

昭君が賂賂を贈っていたならば、生涯を終わるまで無事に王に奉公することができるといっただけで、後世に名を残すことはできなかっただろう、という解釈、その解釈の立場からの訓読である。きわめて特異な訓と解釈と言うべきだろう。このような従来の注釈では考えられないような新説を、虚構の物語の中で登場人物の口を借りて表明するのが私にいう（学説寓言）の方法である。

作者自身にも、それが学問的には無理な解釈であることは分かっているのだろう。学問的な書としてそれを公にしたら、学力教養を疑われかねない。また説の根拠も示せない。だが、虚構の中であればそれが可能になるのである。無理筋ではあるが言ってみたいというところだろう。では作者はなぜ社僧のような解釈をさせたのか。

#### 四 「徒然草」三十八段の名利の説

社僧は、王昭君の詩句を、かなり無理かと思われる訓みで、昭君の利欲否定のふるまいを称美した表現として解釈する。そして「凡今の代に仕ふる人を見侍るに、其心得違ひあるも少なからず。我才覚の及ばざる事はしらで、天下の大官に昇らん事を好み、彼方此方の画工をたのみて、うつくしく彩色、形勢の途に奔走して」と、名利にまみれた今の武士批判に転じる。暴君であった桀紂（桀は夏の、紂は殷の王）よりも、潔癖を貫いて首陽山に餓死した伯夷・叔斉を人々は好み、榮華を極めた平清盛よりも、薄命の楠正成を羨む。利のために法を説く僧職は「売僧」と卑しめられ、利のために仕える武士は「商奉公」と誹られる。そして、

名利めいりふたつながら忘れてこそ、道に近づくともいふべけん。  
至人しにんは名もなく徳もなし。

猶可不可一条の道を得ば、何ぞこれらを論ずるの勞を待んや。

と結論づけると、良雄は「内におもひある身にしなければ」衝撃とともに感銘を受ける。ここに、作者の「意趣」があることは疑いない。

社僧の言は「名利に使はれて、閑かなる暇なく、一生を苦しむるこそ、愚かなれ」ではじまる『徒然草』第三十八段を踏まえている。老荘や仏教思想の影響を指摘される段であり、林羅山の『野槌』は、本段の趣旨に賛意を示しつつも、儒教的立場から天下の名利まで放擲する姿勢を非難し、「若兼好に我道（儒教）をきかしめば、向上の工夫あるべきに、いと口惜からずや」と熱弁をふるう（川平敏文『徒然草をめぐる儒仏論争―中世的学知の再編』（徒然草の十七世紀）岩波書店、二〇一五年）

『徒然草』三十八段は、「智恵と心」とによつて後世に誉れを長く残したいものだが、よく考えると、誉れを愛するのは、他者の評判を喜ぶことであり、そういう他者とはすぐに過ぎ行く存在であつて、むしろ誉れとは誇りの元であり、これを求めるのも愚かであるという。そして、それでも智と賢を求め願う人の為にいえば、智恵は偽りを生み、才能は煩惱を増長させる。人から聞き、学んで知るのはまことの智ではないと述べ、

いかなるをか智といふべき。可不可は一条なり。いかなるをか善といふ。まことの人は、智もなく、徳もなく、功もなく、名もなし。

と断じる。この引用部分を社僧が用いているのは明らかである。社僧は『徒然草』のいう「まことの人」を「至人」と表現しているが、それはこの部分の典拠である『莊子』「逍遙遊篇」の「至人は己れ無し。神人は功無し。聖人は名無し」に基づく。『野槌』や『徒然草文段抄』は、もちろん典拠を指摘している。先に引いた、徒然草を戸田茂睡に講釈させるという趣向の第六話を創つた作者であれば、『徒然草』の注釈書を参照していたのは確実である。

そうすると、社僧は、兼好の化身であるという読みも可能である。兼好は「仮名手本臣蔵」の世界である『太平記』の登場人物であることから、連想の糸で繋がつてはいる。ただし、兼好と北野天満宮の関わりについては見出せない。

## 五 太宰春台の赤穂義士論

社僧の教えを受けて、「良雄は内におもひある身にしなければ、いはり 碓いはりすることく覚へて（心中にある思いがあつたので、鍼を刺されたように感じて）」、あふてくる涙をこらえきれなかつた。良雄の内なる思いとは、誰が考えても吉良討ち入りを決行するか否か、決行するとしたらいつという方法で、という思いであろう。では、社僧の名利否定の言葉は、なぜ良雄の胸に響いたのか。

良雄は大三郎に、宇治川先陣や草摺引きの絵馬を見せて、「いにしへの兵はかくこそ勇みて、世の名をしらるゝ」ことを教えていた。これは武士が「世に名を知られる」ことに価値をおくこと、

つまり名分を重視する教えであった。そして王昭君の絵馬については、賄賂を贈らなかつた昭君を称えつつも、その悲劇に同情し「もし賄賂を贈っていたならば、君王に終生仕えることができただろうに」という「和漢朗詠集」の詩句を口ずさんだのである。もちろんこの解釈は、「和漢朗詠集」の解釈としては一般的な解釈であった。「利」をとらずに「名」をとった者の話として良雄は大三郎に教訓しようとしたのだろう。いずれにせよ、良雄は名利にこだわっていたと読める。そこに「名利ふたつながら忘れてこそ、道に近づくとはいふべけん」という社僧の言葉が刺さったというわけである。

作者はなぜこのようなことを社僧に言わせたのか。そこには、大石良雄をはじめとする赤穂浪士たちのふるまいへの、同時代の様々な評価と議論が関わっているのではないか。そのような見通しを立てた時に、視野に入ってくるのは、赤穂義士論として大きな反響のあつた、太宰春台の「赤穂四十六士論」である。執筆は享保十六年から十八年頃と推定されている（日本思想大系「近世武家思想」所収「赤穂四十六士論」頭注）。赤穂義士批判書としては佐藤直方の論とともに有名であり、反論を含め、大きな反響があつた。この春台の「赤穂四十六士論」は、まさに「名利」をキーワードに、大石良雄をはじめとする赤穂家臣を批判しているのである（なお、主要な赤穂義士論を分析検討した著書に田原嗣郎「赤穂四十六士論 幕藩制の精神構造」吉川弘文館、一九七八年がある）。

その要旨は、左記のごとくである。

一、吉良義央は浅野長矩を殺したのではないから、讐ではない。  
二、幕府が、吉良を傷つけただけの長矩に自決を命じたのは、過ぎた刑であり、赤穂家臣は幕府を恨むべきであつた（藩臣は幕府に仕えているのではなく、大名に仕えているのだ）。

三、赤穂家臣は城を背にして幕府の使者と戦い、しかる後自決すべきであつた。さもなければ速やかに江戸へ行き、吉良を攻め、結果の如何に関わらず死ぬべきであつた。それをせず、時を待ち、陰謀秘計を用いて吉良を殺そうとした。「その志は事を済し、功を成して以て名利を要むる」（原漢文）に在ったからである。

四、吉良を討つたのであれば、その罪は死に当たるのであるから直ちに自決すべきであつたのに、処分につき幕府の命を待つたのは、あわよくば仕官しようとする邪心からであり、「名利を要むる者」であり、「大義を仮りて以てその利欲を済す者」である。

これに対する反論も、「名利」をポイントにしている。松宮観山の「読四十六士論」は「大義を仮て其の利欲を要す」といへるは豈刻薄に非ずや」といい、五井蘭洲「駁太宰純赤穂四十六士論」は「凡そ將士の闕に趨くや、みな必ず死するの心ありて、生くるの気なし。然らずんば安んぞ能く不測に入り、身劍芒の質（劍の切先の質）と為らんや。これ儒生文人の関知せざる所なり。良雄ここにおいてただ敵をのみこれ求め、身の死するを顧みず。あに名利を要むるに違あらんや」といい、「この後数百言は、みな強誣の辞にして、以て名利を要むるの説を敷衍す」と締めくくる。

幕臣であつた成烈が、赤穂義士の議論に無関心であつたとは思えない。まして春台の義士論は、広く流通し、天保期まで続いていったものである（前掲田原著書）。

要旨の三に挙げたように、春台は山科に隠棲して仇討のタイムングを待ち続けた大石良雄を、厳しく批判した。大石が失敗なく吉良を殺して名利を得ようとしたからだ。

この春台の批判を下敷きにすると、本話は、討ち入り直前の冬なかばを想定しており、この後日談として、名利に縛られていた大石が、北野の社僧の言葉に刺激されて、名利を顧みずに、討ち入りを実行した、と読者が想像することも可能だろう。

おわりに

本話は、「王昭君」詩の新解釈を示す〈学説寓言〉であるが、その解釈は学問的にはかなり無理がある。なぜならば、作者の思想を託した社僧の、名利論を引き出すための解釈だからである。おそらく作者もそこは承知しているだろう。同じような構図が、第八話の「嵯峨の隠士三光院を語る」にある。この話については、かつて「大江文城と源氏物語秘伝―〈学説寓言〉としての『怪談とのみ袋』冒頭話―」（語文）第八十四・八十五輯、二〇〇六年）で触れている。「明星抄」の著者三条西実澄が、嵯峨に隠棲する老翁に会い、「源氏物語」論をかわすが、そこで老翁は、珍説ともいふべき新説を披露する。あきれた実澄は、そのようながち過ぎの説は堂上では用いないと退けると、老翁は、下民の詞だから

用いないのは大道にもとると説教する。本話の主意はむしろ「下民の詞を用いるべきである」というところにあり、鑿説はそのために出したものである。とはいえ、学問的な著述ではない読物の場で、開陳してみたかった説でもあるのだろう。本話の王昭君の説もそういう説であつて、学問的に自信があるわけではないが、読物という世界を借りて、披露してみたかったという側面もあるのではないか。

本話は、物語の作り方としては、諸々の綻びがあるとはいえず、議論を主体におく初期読本としての魅力を十分に備えたものと言える。同様に議論を組み入れた「白峰」「仏法僧」「貧福論」を含む「雨月物語」とほぼ同時期に本話を含む「新斎夜語」が刊行されたということは、「雨月物語」が孤絶の作品では決してないということを示すことになるのであろう。

（付記）

本稿は、二〇一五年八月二十九日に行われた京都近世小説研究会で発表した内容を基にしている。発表後、ご教示を賜った方々、および村上義明氏に深謝申し上げます。

（いいくら・よういち 本学教授）